

自分ではない他者の記憶に共鳴する。

自らの記憶を呼び起す。

他者の記憶を旅する。

原風景に纏わる語りと、記憶と、対話と、想起活動。

語りは風景を呼び、
風景は記憶を呼ぶ。

—— 原風景の交換を通じた想起活動、擬似体験の提供 ——

人はだれしもが自分の原風景を持っている。

懐かしさを伴う忘れられない風景。

それは、地元の好きな風景だったり、生まれた家の景色だったり、人によって異なる。

原風景について、文学との関係から論じた奥野健男は、著書の中で以下のように定義している。

『文学における原風景』著者 奥野健男
- p. 45

つまり彼らの幼少年期の、あるいは青春期の自己形成空間として深層意識の中に固着し、しかも血縁、地縁の重い人間関係もわかつがたくからみあった、彼らの文学を無意識に規定している時空間、それらを象徴するイメージを“原風景”と定義したいのだ。

…そういう他者の眼で眺めることも描写することも出来ない、もっと内部に向かって屈折したものなのだ。

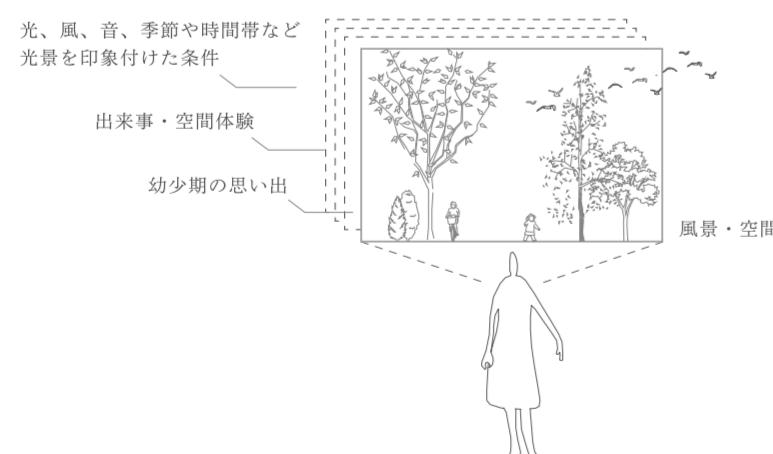
また、心理学から原風景研究をおこなった呉宣児は、原風景の共有には語りが有効であると唱え、“原風景は物語りである”と定義している

『語りからみる原風景 心理学からのアプローチ』
著者_呉宣児 - p. 11

…ある空間を直接体験した人も、直接体験したことのない人も、語り合いのなかで、体験し直したり、また体験したかのような感覚が生成され、「私」が体験した場所・空間・風景ではなく、「私たち」が体験した空間・場所・風景になっていくのでした。

…原風景は「山の風景である」「夕日の風景である」「田園風景である」など、何らかの空間・風景・場所名で片付くやり方でも考えられますが、最終的には、原風景は「物語りである」という結論に至りました。

本研究の 定義



原風景とは、本人だけが他者に見えない要素（——幼少期の思い出や出来事、体験、その光景を印象付けた条件——）を含めて見ることが出来る、個人的な景色である。また、原風景とはその人の「原点」的役割をもち、年月が経過してもその場所から離れても思い出される、懐かしさを伴う景色である。

研究の目的



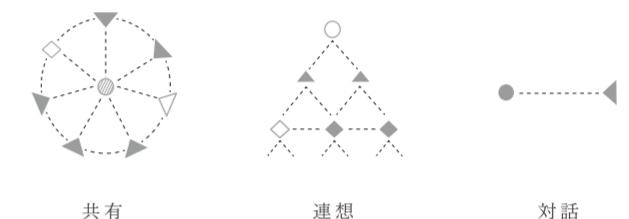
原風景を通じた人と人、場所と記憶、自分自身との対話の場を設けること。
個人の場所の記憶を残し、人と交換・共有できるアーカイブのような場を設けること。
記録やメディアを介して、かたちのない記憶を他者と共有し、伝える方法。

対話・体験型展示

そこで、作者の原風景を呼び水に、鑑賞者の原風景や記憶を呼び起こし、語らい、記録に残すことを目的とした対話・体験型展示の試みとして、本研究に取り組んだ。

語りによって、「私の」体験した場所・空間・原風景が、「私たちの」体験した場所・空間・原風景になっていくには、どうすれば良いのか。記憶の連想はどのように起こるのか。原風景語りにはどのような対話方法があるのか。

四つの手法を考え、実際に制作、全三回に渡る実験展示を行った。



本研究の意義

「訪れたことがない場所を擬似体験する」という点において、例えばGoogleのスクリーンショットやリートビューで風景を視察したり、文献やインターネットから地歴や土地の情報を得ることは出来るかもしれない。

しかし、その場所に実際に住んでいる人が体験したことやそこで起きた出来事など、個人の視点を通した具体的な空間体験のエピソードは、その土地・空間を訪れたことない人にも、親しみを感じさせ、場所の解像度を上げてくれる重要な要素であるに¹⁴間わらず、語らなければだれも知り得ることはなく、共有することは出来ない。



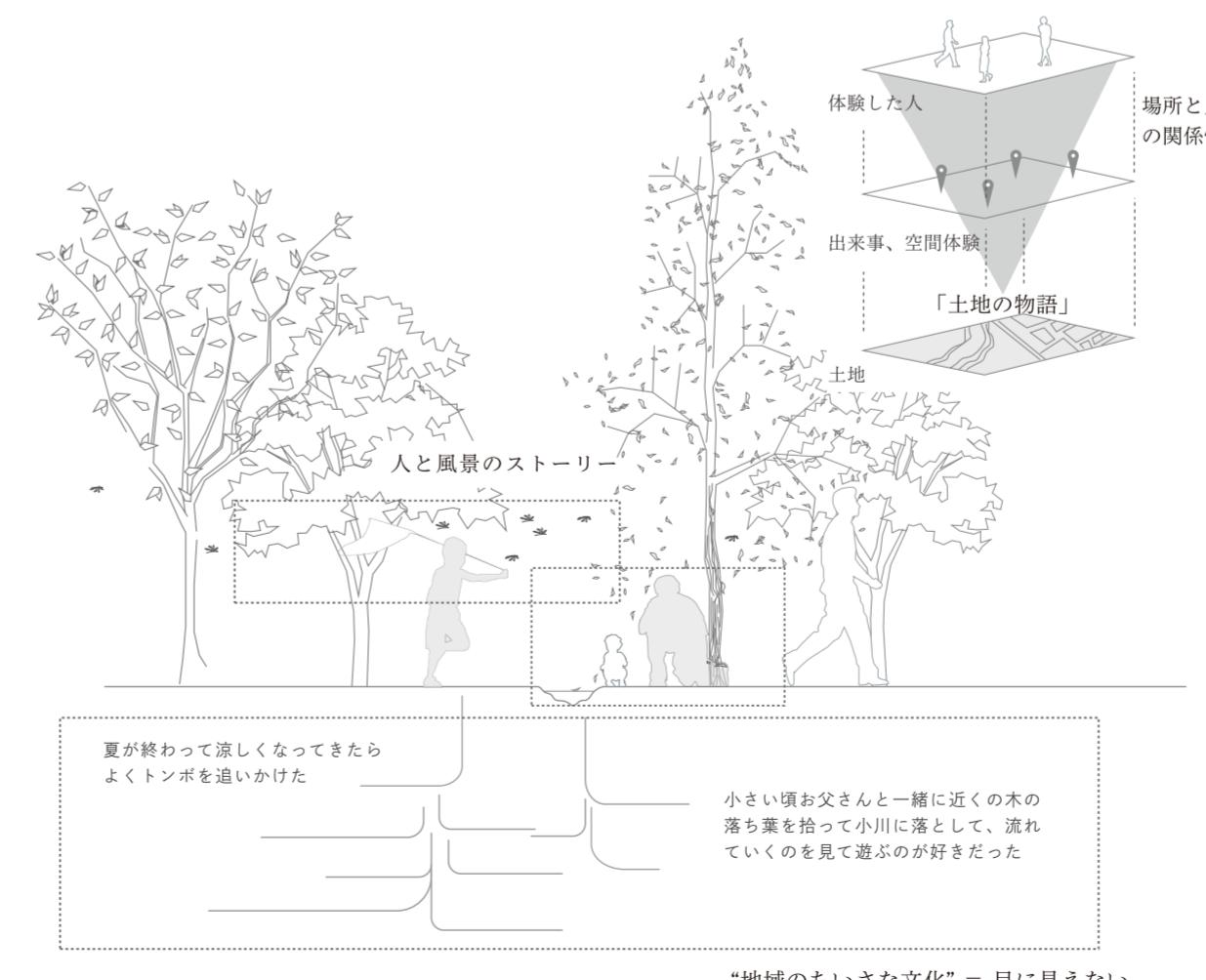
オンライン上のデータベース

記録に残っていれば、いつでもだれでもアクセスして情報を見ることが出来る。

個人の場所の記憶／体験のストーリー

“夏の終わりは夕陽が綺麗、道の真っ直ぐ向こうに一本の風車が見える”

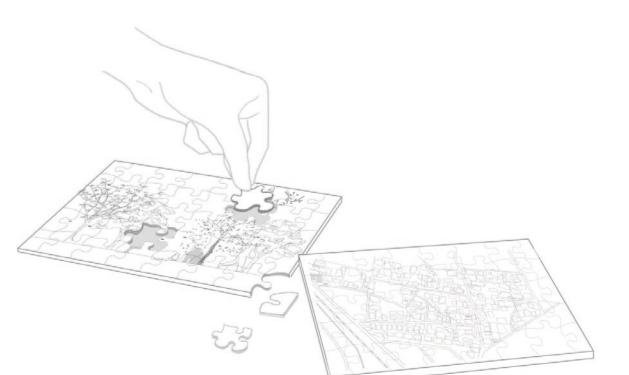
“車一台通るのがやつとの細い道だから、人と車が譲り合う。冬は道沿の住人で協力し雪かきをする”



人と風景のストーリーは、その土地に物語として編み込まれ、場所と住人の関係性を紡ぎ、地域の小さな文化として根を張っている。

しかし、これらは目には見えないため記録として掬い上げられにくく、史実からはこぼれ落ちてしまう弱い情報とも言える。記録に残す場や共有の機会がなければ、人の記憶と時間と共に風化してしまう

さきやかなシーンでも、その場所に伴う体験・場所の記憶を語ること、記録に残すこと、それらに耳を傾けることには価値があると私は考える





2 記憶の往復書簡

展示を見た鑑賞者と原風景についてより深く対話をを行うための有志参加型の試み。

| 鑑賞者自身の原風景を投稿

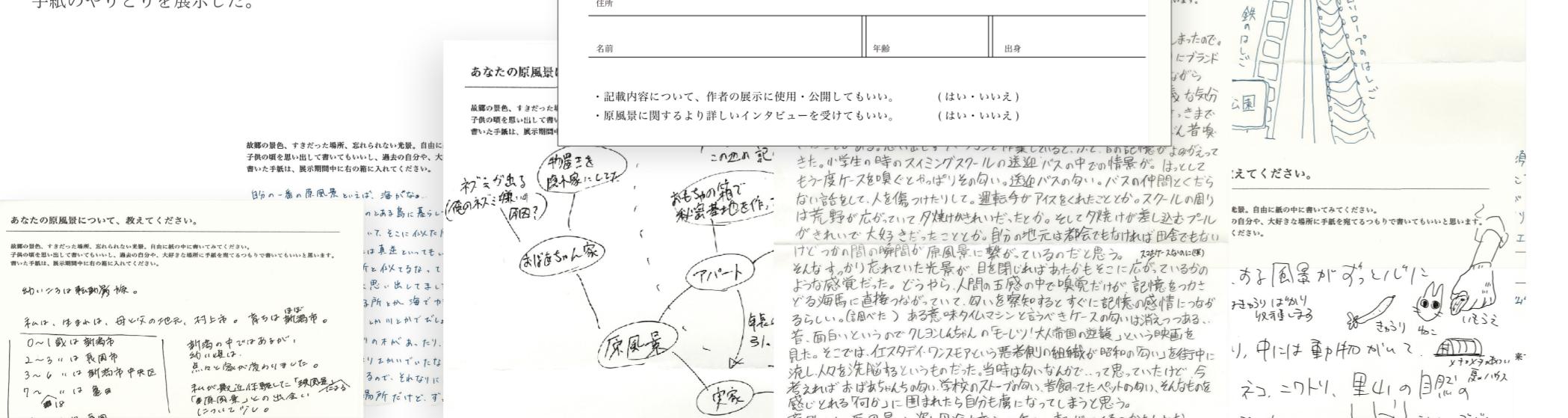
展示期間中、任意で自分自身の原風景について書いてもらい、投函してもらう。

| 作者本人からの返信

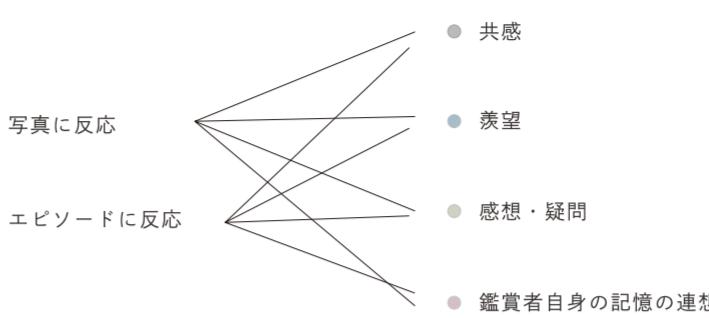
投函された鑑賞者の原風景に、作者が返事を書き展示最終日にフィードバックを送る。

まさしく往復書簡のように、原風景について手紙のように文面で対話を試みる。

最終展示では公開許可が得られたものに限り、手紙のやりとりを展示した。



書き込みは写真単体、エピソード単体に反応しているものと両方あり、主に
[共感／羨望／感想、疑問／鑑賞者自身の記憶の連想]に分類出来た。

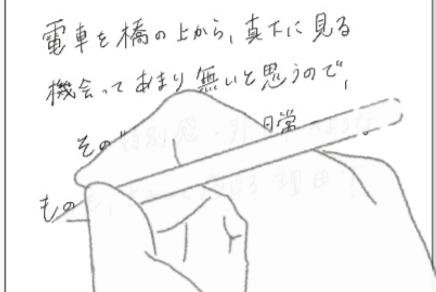


1 原風景の交換

強く印象に残っている景色。通学路で通った陸橋。当時、通学途中の景色が変わった視点場でもあった。

橋の下には八戸駅から続く線路が通つており、この陸橋から遠くにもう一本橋が架かっていた。そのため、時折橋の下を電車が通っていくのだが、電車の行く末はもう一本の橋でちょうど隠れて見えなくなってしまうため、電車が見られるのは僅かな時間である。陸橋の下を電車が通過ぎいくと、やがてもう一本の橋の下を通り、姿は見えないまま自分が残る。

子どもの頃から、この景色がなぜか無性に寂しく感じられた。電車が向かう先、線路がどのように続いているかは地図を見れば分かることだが、電車が通り過ぎていく時の風、音、陸橋という高さのある視点・場所が、そのような気持ちにさせたのかもしれない。



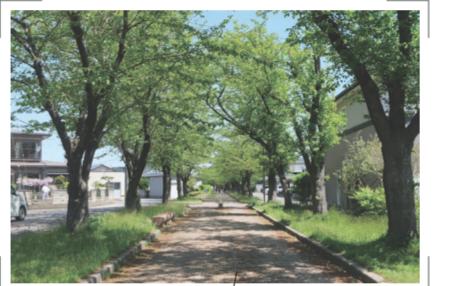
作者の原風景の各エピソード

鑑賞者が想起したこと

作者の思い出深い風景の写真をエピソードと共に展示する。エピソードは冊子形式にし、左側に作者の語りを載せ、右側には鑑賞者が自由に書き込めることにする。左側のページには、何か想起したり感じる引っ掛けになった單語・文章にマークしてもらう。

書き込みが増えることで、ページをめくるごとに作者の記憶、自分の前に書き込んだ人の記憶、さらにその前に書き込んだ人の記憶というように、複数人の記憶が重なっていく。

この冊子は鑑賞者が書き込み書き込むほど、誰かの記憶や思い出が別の誰かの思い出を呼び、呼び水となる。



「並木道の通学路」

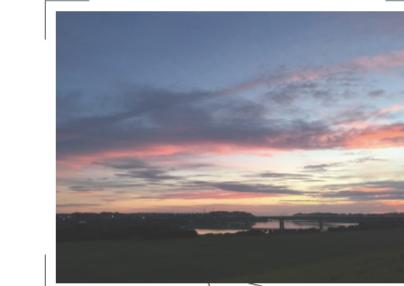
通学路は何十メートルにも続く桜並木が有名だった。春は桜のトンネルが、夏は木陰がきもちよく、秋は落葉した枯れ葉の絨毯を踏んで歩き、冬の朝は深く雪が積もった真っ白で果てのない道に、誰かが先に歩いて残してくれた足跡の上をなぞるように歩いた。

【風景・羨望】

歩くのに気持ち良さそうな道で、自分もこんな通学路を歩いて高校まで通ってみたかったなと思いました。

【記憶・エピソード / 共感 —— 記憶の連想】

雪国の人々はみんなそううだよね。一人分の足跡しかないときは、自分の足の大きさと比べっこして歩いたなあ。



「黄昏橋」

夕暮れの中に浮かぶ秋田大橋と雄物川を土手から見た景色である。七月の夕方、町が夕焼け色で染まつていく時間だ。一年半、高校に通うのに毎日渡った秋田大橋入り口には井上高秋の「たそがれ橋」という詩が刻印された御影石がある。橋を渡ると思い出、好きな詩だ。

【風景・共感 —— 記憶の連想】

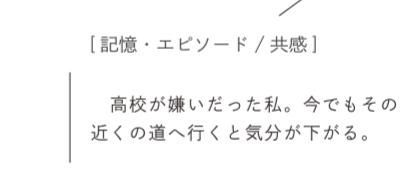
【風景・共感 —— 記憶の連想】

中学が家から遠くて部活が終わった帰り道はいつもこの写真のような夕暮れの空を眺めながら自転車で帰っていました。



「好きになれない風景」

家から小学校まで通う通学路の景色。私はこの風景を当時から今まで、好きになることが出来ずにいる。私は当時「何もない」景色だと思っていた。じゃあ、何があれば、「ある」景色だと思えたのだろう。公園や気軽に買い物出来るお店だろうか。楽しい思い出だろうか。



「目蓋の裏の海」

友人から「君の話す『海』は港だよね」と言われたことがある。私たちは同じ「海」という言葉を使っていて、目の裏では、自分がよく知っている「海」を見ながら話をしている。

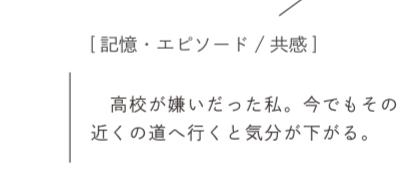
あなたの言う海とは港ですか。

汽笛は聞こえませんか。

【記憶・エピソード / 共感 —— 記憶の連想】

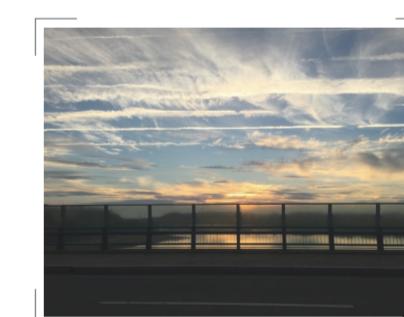
海って言われると自分も港が出てくる。

静かで船を駆けめぐらす音がチャリチャリと鳴ってる。落ち込んでいるとうとうしてしまう場所。



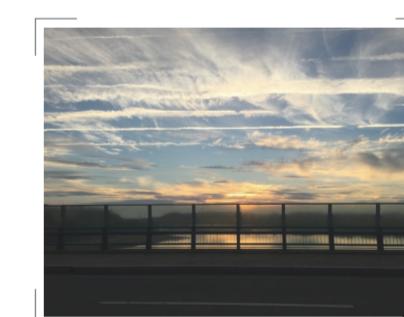
【記憶・エピソード / 共感】

高校が嫌いだった私。今でもその近くの道へ行くと気分が下がる。



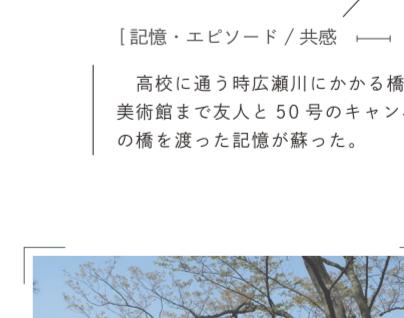
「陸橋」

陸橋の下を電車が通っていくのだが、電車の行く末は遠方に架かる橋で隠れて見えなくなってしまうため、電車が見られるのは僅かな時間だけである。後には踏切の音と、姿の見えなくなった電車の音だけが残る。子どもの頃から、この景色がなぜか無性に寂しく感じられた。



「夏を渡る」

高校一年生から二年生の夏まで、学校までの通学路で大きな橋を渡っていた。思うように課題や制作が出来ずB1パネルを抱えて泣きながら帰ったり、大きな賞を受賞して大喜びで母親に電話しながら帰ったり、文字通り汗と涙を共にした。



【記憶・エピソード / 共感 —— 記憶の連想】

高校に通う時広瀬川にかかる橋を渡ったなあ。美術館まで友人と50号のキャンバスを抱えてその橋を渡った記憶が蘇った。



「東屋より」

この東屋から、自分が住んでいる土崎の町や、男鹿半島の寒風山を見ることが出来た。この景色の中に自分たちの住んでいる証を見つけていくような作業をした。広い街並みの景色にも、自分の帰る場所があることが確認出来ると、安心するのだ。



3 原風景図鑑

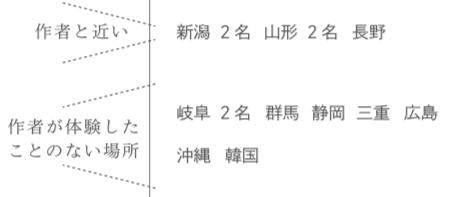
作者と出身地も見てきた景色も異なる、あるいは似ている十数名の方に、原風景と住環境の遍歴についてインタビューを行う。原風景の図鑑として取材記録を展示。

また、インタビュー後半には、聞き手の相槌や話題の転換、語り手の反応や会話の流れなどを分析し可視化したページを掲載。目前で実際に風景を共有することが出来ない両者が、語りの中で、どのように風景が共有していくのか。語りの流れを見ることが出来る実験的な展示記録でもある。

語り手は知人や友人に協力を依頼し、主に大きく分けて二つの観点に注目した。

[1] 出身地が近い・あるいは作者が行ったことのない場所に暮らした経験がある

1) 語り手の出身地、長年暮らした場所



日本海側・東北地方など、作者と出身地が近い場合、見てきた風景や風景体験にも近しいものがあるのではないか。あるいは全く違う風景を見て育った人ならば、作者の原風景と比較出来るのではないか。

語りのタイプ

1 事実説明型

“田んぼの奥に工業団地があって、その風景を車に揺られて見てる。それは思い出出すな。”

風景や体験の説明をするときに、「綺麗だった」「楽しかった」という主観的な感情表現は説明に入ってきたが、その場所で何が起ったか、何が見えていたか、建物や空間の位置説明など、漠々と事実のみの説明に徹する語り口。

2 風景回想型

“朝ラジオ体操に行くんだけど、向かうまでの住宅街と田んぼが交互にあるような道のり。夏の青い空と、朝早く起きて歩いてる、あの風景。”

“後方に煙、前には駐車場があって、その奥に茂みがあって川が流れてる。中学生の時野球部だったから、河川敷の橋の下で壁当てやキャッチボールをした。”

4 評価・意味づけ型

“家の方向から見て綺麗な景色になるように造園されたと思う。放置されてるけど、石灯籠なんかもあるしね。”

“犬山城っていうお城があるんだけど、私の部屋から見えるんだよ。左手に犬山城、ちょっと覗けば成田山も見える、遠景には名古屋の中心地に高層ビルが建ってるのも見える。”

“私も通っていた幼稚園に藤棚があったよ。よく木に登ってたの思い出したなあ。支柱に藤の木がちょうど良い感じにうまく絡まって、登りやすくてさあ。”

3 体験再現型・演劇型

“引越した先がすごい山奥だった。姉が中学を卒業するタイミングで転校したんだけど、海の環境から山の中へって、なかなか稀な体験だったと思う。”

“宿場町に取材しに行ったのね。自分の中での、その場所で起きた思い出が作られた瞬間に、自分がそこに「所属してる」って感覚が一気に湧いたかもしれない。”

“私の中では早起きするのは5月とラジオ体操のある8月って決まってるの。あの季節限定の、朝早い静かな学校の空気は好きだったなあ。あの朝6時に戻りたい時がある。”

5 映像描写型

“海の近くの街で、海辺に公園があった。そこには釣りをしているおじさんがいて、おじさんは魚釣りをして獲れた魚を狙っているねこれがいて。”

“公園の中に公衆トイレがあって、そこはねこのたまり場になつて、いつも10匹くらいねこがいた。キャットフードが置いてあったから、誰かがあげていたんだろうね。”

“それから、塩の匂いや香り。サー、サー…っていう海の音は、心地良くて覚えてる。ぼーっとする景色だった。小さい船がどまってる、だんだん遠ざかっていく景色も覚えてる。”

6 語り以外の特徴

頻繁に身振り手振りやジェスチャーを用いて説明する感情が昂ったり奮興したとき、思考するときによく手が動く

思考整理タイプ

位置関係説明のとき、空中に手を置く、その場にあるものを「これが～として」と例える、机に指で地図をなぞる

データタイプ

あまり手を動かさず身振り手振りが少ない。風景説明の際に語りよりも写真を見せたり地図を調べたり携帯の写真フォルダを探す人など、個性が表れる。

山形県鶴岡市出身。生まれも育ちも鶴岡で、実家は祖父が建てた、父が子供の頃からある家。家族構成は祖父母、両親、妹、弟の7人家族で、現在も実家は三世帯住居である。父も同市育ち、母も同じ山形県出身。父と中高同じ学校に通っていた。

三重ってお茶が有名なんだけれど、田んぼみたいに普通歩いてると茶畠があるんだよね。季節になると機械でお茶っぽを刈って、そのまますごいお茶っぽの匂いがした。黄緑の鮮やかなグリーンから、椿の葉みたいな濃い色の緑に色が変わんだけれど、いちばん新しい葉っぱを刈った後、濃い緑になるまで黒布を被せて、二番目に刈るお茶のことを“かぶせ茶”って呼ぶ。

あと、山本といえば私にとっては、近くにあった神社、つばき大社っていう神社で、夏祭りがあって、盆踊りを踊った。夏祭りの夜に友達と一緒に喫茶店に行ったり。その思い出が強いなあ。入道が岳っていう標高960mくらいの山も、5時間くらいかけて登ったよ。

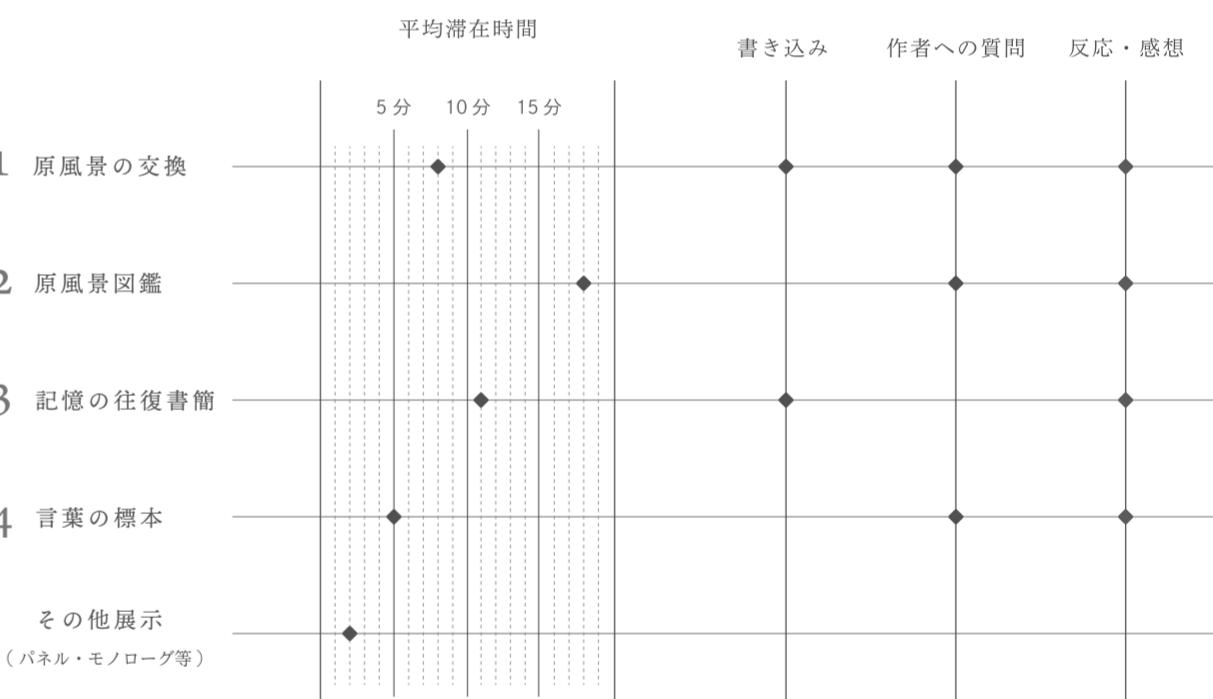
4 記憶、あるいは言葉の標本

原風景について様々な人と対話をする中で採集した言葉たちを、標本のように並べて展示する。

これらは全て誰かが発した、あるいは書き残した言葉であり、誰かの原風景にまつわる記憶もある。好きな言葉やピンとくる言葉があれば、鑑賞者はむしろピンを外して言葉を持ち帰ることも可能。



展示物の反応



四つの展示方法は、様々な共感・連想のフェーズに合わせてパターンを用意し、広範囲の人がこの展示で反応が出来る・入り込める余地をつくる。



解像度の高い写真を見せて、直接的に原風景のイメージを伝える



テキストのみで鑑賞者自身に風景を想像させる

抽象的



説明的
具体的

匿名性が高く、鑑賞者の自由な解釈に委ねるもの

テクスト

コンテキスト

展示
計画

実験展示 i
[学内展示]

11/17

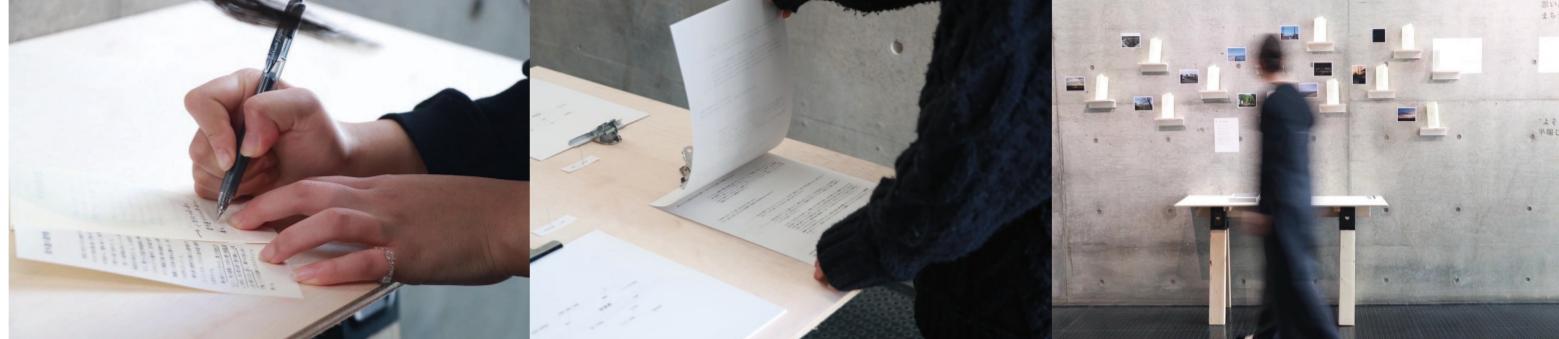
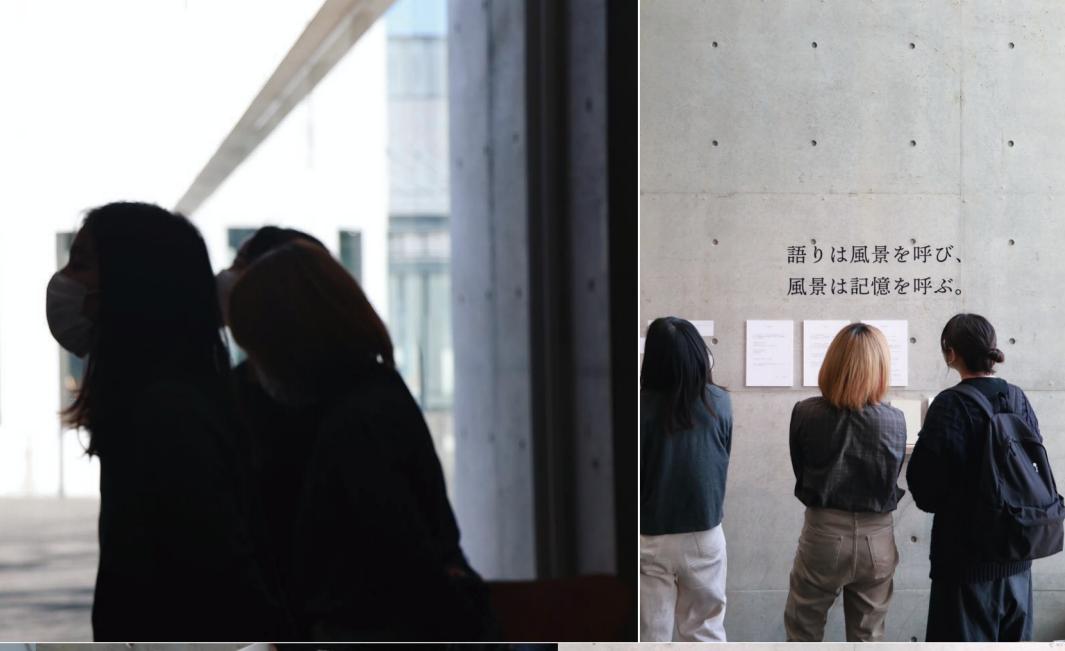
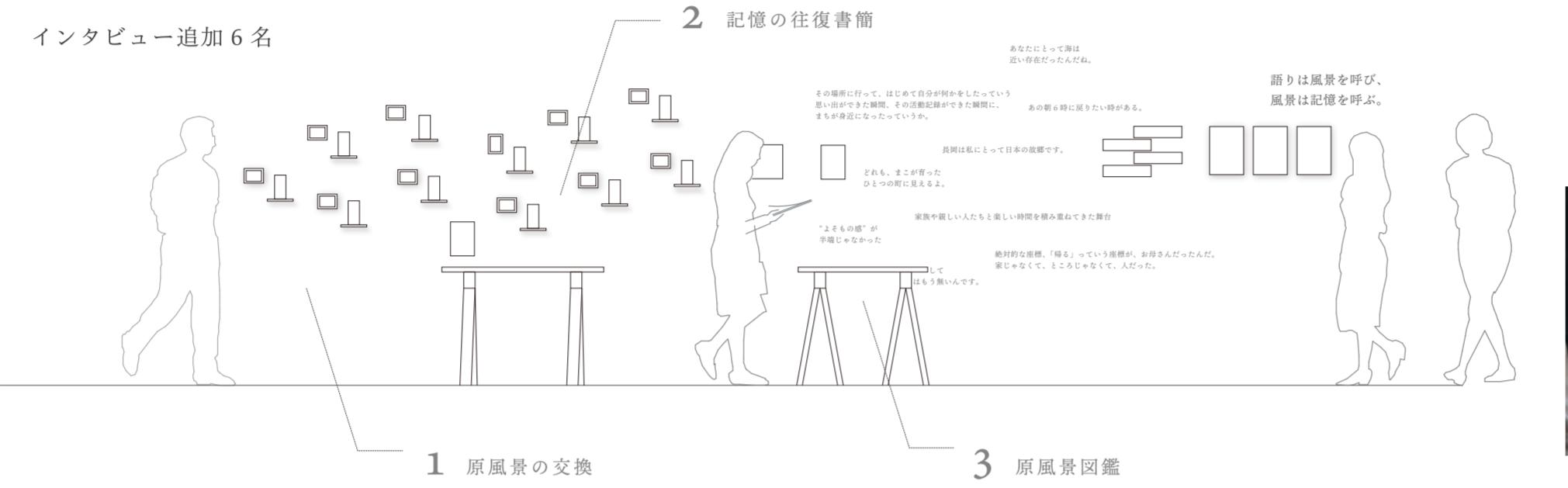
原風景 インタビュー

- 1 原風景の交換
- 2 記憶の往復書簡
- 3 原風景図鑑

+書き込み募集

11/22

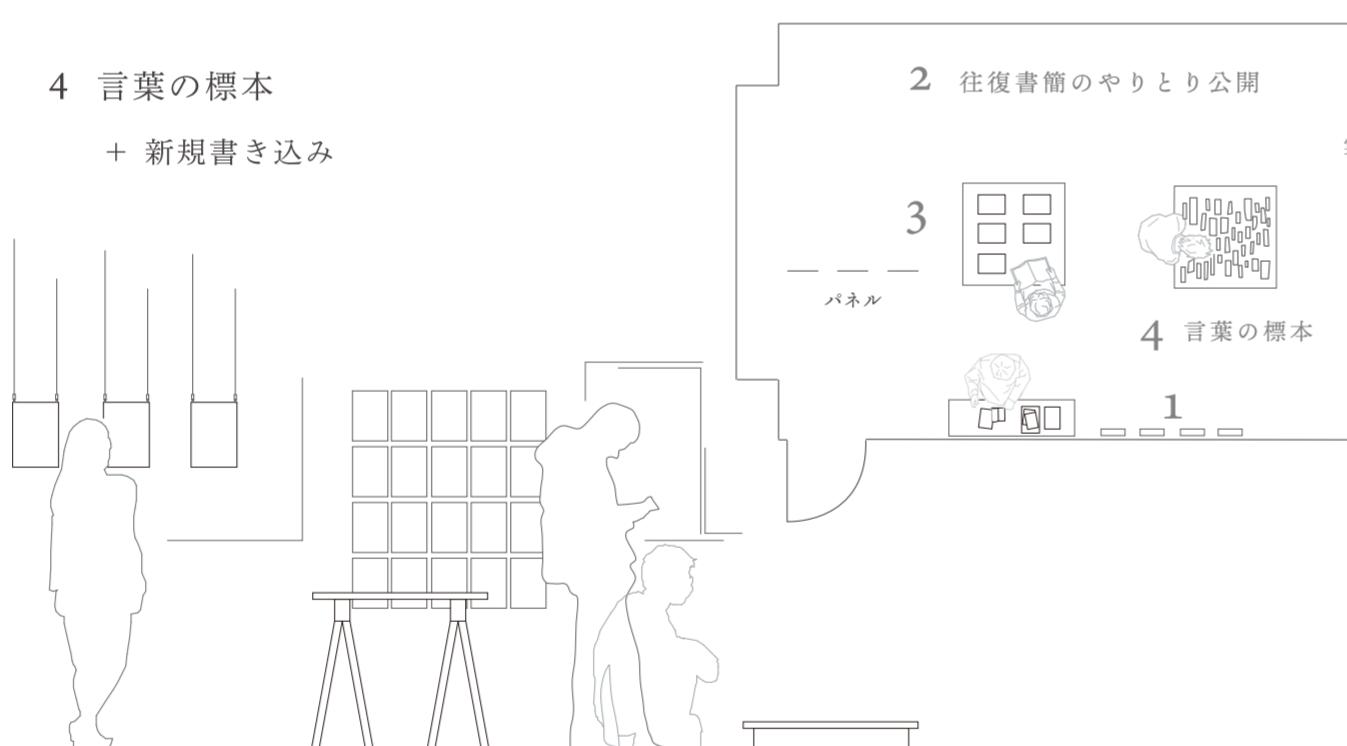
インタビュー追加 6名



実験展示 ii
[学外展示]

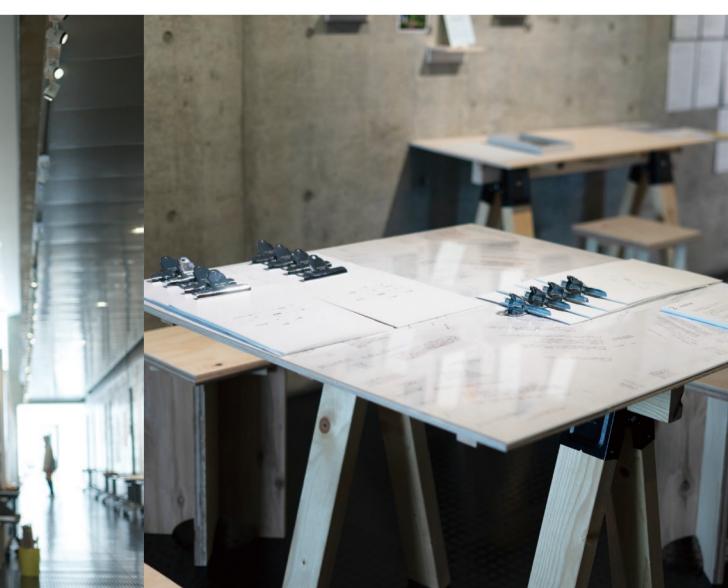
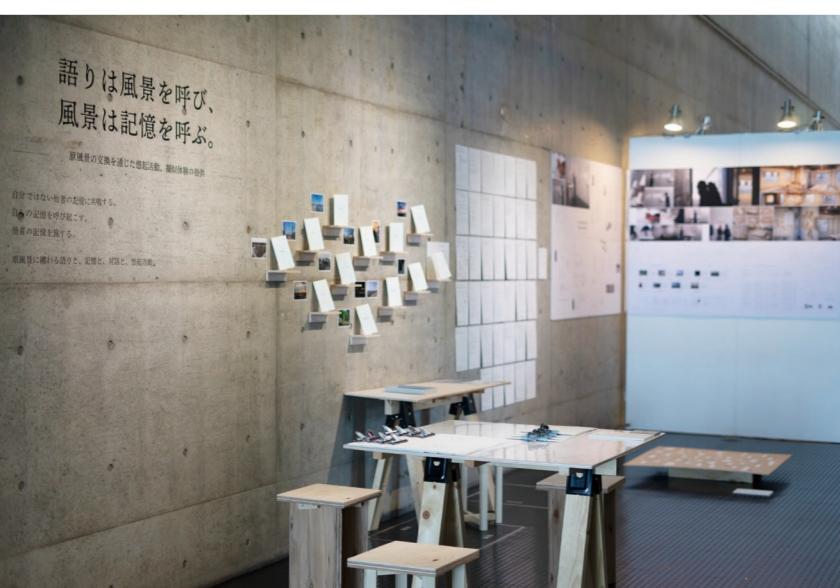
12/4 - 12/5

- 4 言葉の標本
+ 新規書き込み



最終展示 iii
[卒業制作展]

2/11



2/14